

2024年度
事業報告書



Meitoku
since 1925

学校法人千葉明德学園

目 次

I. 法人の概要	1
1. 法人の名称	1
2. 事業所の所在地	1
3. 建学の精神	1
4. 法人の沿革	1
5. 設置する学校	2
6. 附帯事業	2
7. 姉妹法人	2
8. 役員	2
9. 教職員の状況	3
10. 土地及び建物の状況	3
11. 学生・生徒・園児の数	4
II. 事業の概要	5
1. 学園全体の状況	5
2. 法人事務局	6
3. 千葉明德短期大学	6
4. 千葉明德高等学校	11
5. 千葉明德中学校	15
6. 千葉明德短期大学附属幼稚園	18
7. 明德本八幡駅保育園	20
8. 明德浜野駅保育園	22
9. 明德やちまたこども園	24
III. 財務の状況	26
1. 事業活動収支の推移	26
2. 事業活動収支計算書における財務比率の推移	27
3. 施設・設備への投資額の推移	28
4. 借入金の推移	29
5. 貸借対照表の推移	29
6. 貸借対照表における財務比率の推移	31

I. 法人の概要

1. 法人の名称

学校法人千葉明德学園

2. 事務所の所在地

千葉県千葉市中央区南生実町1412番地

電話番号：043-265-1611

FAX番号：043-265-1651

URL：<https://www.chibameitoku.ac.jp>

3. 建学の精神

「明明徳於天下者先致其知」

明德を天下に明らかにせんとする者は、先づその知を致せ。

法人名及び開設する全ての学校、施設名に用いられている「明德」は、中国の古典「大学」の一部にある「明明徳於天下者先致其知」（明德を天下に明らかにせんとする者は、先づ其の知を致せ。）を引用したものである。「明德」の由来は、約2000年昔の中国の古典「大学」にある。「大学」といっても高校を卒業してから行く大学のことではなく、「小学」に対する「大学」の意味である。「小学」とは「小さな学問」、いわゆる、よみ・かき・そろばんといった個人が生きていくために必要な身の回りの基礎的な学問で、一方、大学は小学よりもっとレベルの高い大きな学問で、自分が生きるためではなく世のため人のためになる学問を意味する。「大学」には、大学を究めるためにはどうしたらよいのかが次のように書かれている。

「大学の道は明德を明らかにするにあり」

「明德」とは人が天から得たすぐれた能力、人間として生まれながらに持っている人間性であり、明德を明らかにする、とはそれを輝かせる、ということであり、それこそが本学園の使命である。

4. 法人の沿革

1925年 1月 千葉淑徳高等女学校 設立 創立者 福中儀之助 初代校長に就任
(千葉市登戸町3丁目)

4月 開校式 挙行 (定員600名)

1943年 7月 財団法人千葉淑徳高等女学校となる

1947年 5月 学制改革により千葉明德高等学校・同中学校に改組

1951年 1月 学校法人化し、学校法人千葉明德学園となる

1963年 4月 高校男子部の新設

1964年10月 千葉市中央区南生実町へ全校移転

1966年 5月 体育館 竣工

1967年	5月	千葉明德学園幼稚園 設置認可
1970年	1月	千葉明德短期大学 設置認可
	4月	千葉明德短期大学 開学
1972年	4月	千葉明德中学校最終卒業生高校進学 以後休校 千葉明德学園幼稚園から千葉明德短期大学附属幼稚園に改称
1974年	4月	高校 男女共学となる
1992年	7月	現理事長 福中儀明 理事長就任
2003年	10月	明德本八幡駅保育園 開園
2006年	4月	社会福祉法人千葉明德会 設立 明德土気保育園 開園
2010年	4月	明德浜野駅保育園 開園
2011年	4月	千葉明德中学校 開校
2012年	3月	千葉市と「避難所施設利用に関する協定」締結
2013年	4月	社会福祉法人千葉明德会 明德そでの保育園 開園
2015年	3月	学校法人北総学園と合併
	4月	明德やちまたこども園 開園
2018年	4月	千葉明德短期大学附属幼稚園 幼稚園型認定こども園に移行
2020年	4月	社会福祉法人千葉明德会 明德土気保育園 幼保連携型認定こども園 明德土気こども園に移行

5. 設置する学校

- (1) 千葉明德短期大学 保育創造学科
- (2) 千葉明德高等学校 全日制課程普通科
- (3) 千葉明德中学校
- (4) 認定こども園千葉明德短期大学附属幼稚園
- (5) 明德やちまたこども園

6. 附帯事業

- (1) 明德本八幡駅保育園（第二種社会福祉事業）
- (2) 明德浜野駅保育園（第二種社会福祉事業）

7. 姉妹法人

社会福祉法人千葉明德会（明德土気こども園・明德そでの保育園を運営）

8. 役員（2025年3月31日現在）

理事長 福中 儀明
理事 由田 新（千葉明德短期大学学長）
理事 宮下 和彦（千葉明德中学校・高等学校校長）
理事 北村 都美子

理 事 木原 稔
 理 事 高浦 芳一（内部監査室長）
 理 事 長嶋 茂雄
 理 事 村松 重彦
 監 事 荒木 由光
 監 事 神子 信行

*役員賠償責任保険は、AIG損害保険株式会社にて加入、支払限度額1億円、保険期間は、2025年2月14日から1年間、保証の対象は、理事・監事・評議員など

9. 教職員の状況（専任教職員数及び平均年齢）（2025年3月31日現在）

	人員数	平均年齢
短期大学教員	15	48.3
高等学校教員	60	42.3
中学校教員	17	37.8
幼稚園教員	23	38.8
本八幡駅保育園	12	32.3
浜野駅保育園	7	44.3
やちまたこども園	17	32.3
事務職員	23	45.4
合計	174	40.2

（注）役員（理事）は除く

10. 土地及び建物の状況

（1）土地の状況（2025年3月31日現在）（㎡）

	法人	千葉明德 短期大学	千葉明德中学校・ 高等学校	千葉明德短期 大学附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校 地	0	13,005	68,279	4,550	2,871	88,705
その他の土地	0	0	68,677	0	0	68,677
合計	0	13,005	136,956	4,550	2,871	157,382

（2）建物の状況（2025年3月31日現在）（㎡）

	法人	千葉明德 短期大学	千葉明德中学校・ 高等学校	千葉明德短期 大学附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校舎	0	3,844	12,016	1,712	705	18,277
附属施設	0	0	3,419	0	0	3,419
その他の建物	0	10	48	0	0	58
合計	0	3,854	15,483	1,712	705	21,754

1 1. 学生・生徒・園児の数

(2024年5月1日現在)

部門	入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数		
千葉明德短期大学	120名	240名	178名	1年	84名
				2年	94名
千葉明德高等学校	400名	1,200名	1,042名	1年	290名
				2年	385名
				3年	367名
千葉明德中学校	120名	360名	241名	1年	77名
				2年	83名
				3年	81名
千葉明德短期大学 附属幼稚園	(1歳児) 15名	315名	280名	1歳児	15名
	(2歳児) 15名			2歳児	15名
	(3歳児) 95名			3歳児	67名
	(4歳児) 95名			4歳児	86名
	(5歳児) 95名			5歳児	97名
明德本八幡駅保育園		60名	49名	0歳児	4名
				1歳児	11名
				2歳児	16名
				3歳児	10名
				4歳児	8名
明德浜野駅保育園		39名	42名	0歳児	6名
				1歳児	8名
				2歳児	7名
				3歳児	9名
				4歳児	6名
				5歳児	6名
明德やちまた こども園		75名	83名	0歳児	5名
				1歳児	8名
				2歳児	12名
				3歳児	19名
				4歳児	20名
				5歳児	19名

Ⅱ．事業の概要

1．学園全体の状況

2024年度の学園財政の状況は、事業活動収入27億206万円に対し、事業活動支出25億7,980万円、経常収支差額は、6,427万円の収入超過、基本金組入前当年度収支差額は、1億2,226万円の収入超過となり、学園全体では、2012年度から13期連続で収入超過となった。(詳細「Ⅲ．財務の概要」参照)ただし、地域の就学人口の減少や保育士志望者の減少、短期大学離れ等社会的要因による影響を受け、短期大学が募集活動に苦慮しており、定員確保に向けて様々な施策を早急に検討・実施し、更なる経営改善を図っていききたい。

2025年度募集活動(2024年度に行った募集活動)について各部門に目を向けると、短期大学は、高校生の保育士志望者の減少傾向が昨年以上に顕著であり、更に短期大学離れも加速、入学者62名と定員を大きく割り込み、220名の定員に対し、144名の在籍数となった。総合保育創造組織の核である短期大学は、系列園との連携、高大連携を更に強固なものとし、学生募集を担うアドミッションセンターと教職員が一丸となり全学的に学生募集に注力、更に新たな取組の検討・実施が急務である。

一方、高等学校は、大学入試において、中学校から入学した一貫コース生、高校入学生の内いずれもが質量ともにこれまでで最高の合格実績を出すことができ、その結果、新たに389名の入学者を確保し、中・高合わせて1200人体制を維持することができた。中学校については、受験者数は増加傾向であるものの、入学者が74名(昨対-3)と伸び悩み、開校以来、入学定員に満たない状況が続く結果となった。

短期大学附属幼稚園については、園の教育目標、教育理念が理解・共有され、新たな重点施策として「園庭利活用の推進・芸術活動の推進・ICTの推進」が掲げられ、園の魅力を高め、多くのイベントを実施し多様な学びの姿を発信し、保護者を含め地域への可視化を重点に募集活動を行った。その結果、1号園児の園児募集は前年に対し若干の回復はしたものの、依然として定員に届かない状況となった。地域の就園対象児童の減少や2号認定への希望増もあり、定員充足に苦慮している現状である。ただ、千葉市内にある他園の1号園児募集状況を見ると、本園は上位であり、今後も、預かり保育の充実、また2号認定園児数の拡大も視野に入れ、募集活動を行っていく。

明德本八幡駅保育園、明德浜野駅保育園、明德やちまたこども園については、各園で掲げる保育理念、保育目標に則した運営方針や重点施策が明確化され、実践されている。また、いずれも昨年度と同様、定員を超える数の園児を確保し、加えて内部研修等を積極的に行い、職員の資質向上も図れている。

2. 法人事務局

(1) 施設・設備の整備

計画通り以下の施設・設備整備を実施し、教育環境の充実を図った。（詳細「III. 財務の概要」参照）

- ・法人 第2グラウンドI期工事 1億2,373万円
- ・短期大学 本館防火スクリーン設置工事 366万円
- ・高等学校 学園本館図書館リニューアル工事 1億695万円
図書館特注書架及び新設備品一式 2,181万円
柔・剣道場空調機設置工事 3,378万円
学園本館屋上防水工事 1,177万円
合宿所改修工事 825万円
- ・幼稚園 保育室天井改修工事 2,123万円
園庭遊具改修設置工事 187万円
- ・本八幡 冷凍庫他厨房機器リニューアル 287万円

(2) 創立100周年記念事業

2025年に迎える学園創立100周年記念事業の主たる事業である、グリーン化計画における第2グラウンド整備について、全4期工事のうち第1期工事を終了し、北側県道からの敷地内への侵入道路整備が完了した。今後も森林教育、森林の育成・保全、学校林としての利活用、緑地管理に重点を置き、第2グラウンド事業の完遂に向け計画的に進めていく。

また、学園本館図書館リニューアル工事も完成し、情報通信機器、自習やグループ学習ができる備品等が整備され、ラーニング・コモンズを目的とした開放的な学習空間が整った。放課後には多くの生徒が利用している。

バリアフリー化については、高校1号館中央に外付けエレベータと多目的トイレを設置する校舎改修計画を立て、その設計段階に入った。

その他、100周年記念祝賀会、100周年記念誌の発刊、明德の教育100周年記念展示、Meitokuタイムカプセル埋設に向けてそれぞれの委員会で準備を進めた。また、周年記念寄付金の募集活動も開始した。

3. 千葉明德短期大学

2024年度は、コロナ禍も収まり、以前のような教育活動が可能となり、学内は落ち着きを取り戻した1年となった。実習、フィールドワーク等、カリキュラム通り実施することができた。

募集については、18歳人口の減少、保育系への希望者の減少が予想を超えて進行

し、他校との競争の激化の中で、昨年度以上に厳しく、10名近くの減となった。

(1) 教育活動

①教育と保育実践の連携

「総合保育創造組織」としての認定こども園千葉明德短期大学附属幼稚園、明德本八幡駅保育園、明德浜野駅保育園、明德やちまたこども園及び系列の明德土気こども園、明德そでの保育園には、本学学生の実習先としてはもちろん、ボランティア、アルバイト等、様々な形で関わりをもち、学生たちにとっての学びの場となっている。また、学生の就職先でもあるという観点から本学内で説明会を行い、ともに学び続ける保育創造組織の仲間の育成についても連携を図っている。

しかし、一方で、現場からの求人に対して十分応えきれていないという側面もある。学生たちに関係園の魅力がより伝わるようなさらなる工夫が求められる。

高校生に対しても、保育に興味を持てるように系列園で「保育体験」を行う機会を設け、保育職への関心を強め、本学で学ぶきっかけづくりを行っている。

同じ敷地内にある附属幼稚園については、本学の明石教授が園長を兼務して5年目となり、引き続き短大と連携して保育の質向上を目指す取り組みが行われた。附属幼稚園の実践について短大教員と幼稚園教員が協働してその成果を本学紀要にまとめている。

②教育活動の取り組み

本学の学びの原点である「体験から学ぶ」・「学び合う」を実現するとともに個々の学生に対する支援の充実が本学の教育の中心である。

1年次の通年の教育実習については、それぞれの時期の学習内容が整理され、どの教員のグループであっても一定の質が保障できる体制が整えられた。

また、2025年度へ向けて、実習ハンドブックの改訂を行った。

コロナ禍もおさまり、以前と同様に授業、実習、フィールドワークを行うことができた。オンライン環境は新たな学習ツールとして定着した。

「体験から学ぶ」大切な機会である「フィールドワーク」についても、国内で宿泊を伴う活動として、「わくわく富山」「わくわく沖縄」「わくわく長瀬」の3コースを実施した。さらに海外のコースも復活し、ウィーンへ行く学生もいた。その他、宿泊を伴わないコースも多く多くの学生が参加した。ゼミ、現代社会論といった授業でフィールドワークが多く行われた。

音楽表現の授業の中で「めいとくはうたう」という学生、教職員、附属幼稚園教職員等による発表会が年2回行われている。今年度は、12月の回に明德

高校の部活動の生徒の参加があり、短大・高校が一緒になって発表する機会を持てたことは画期的で有意義であった。

昨年度から、学生自身が自身の学びを自己評価する「学修ポートフォリオ」の活用を行っているが、今年度で2年間のサイクルが回った。学生にとって自身の学びを確認するツールとして定着させていきたい。

一方、学校生活については、サークル活動等の活性化が求められたが、残念ながら、サークル数は限られてしまった。引き続きの課題である。

学園祭は8月に実施した。学園祭は地域の子どものためのお祭りという面と学生達自身の楽しみという2つの側面をもっている。多くの幼児、小学生が訪れ、楽しい時間を持つことができた。また、施設関係や学園で行っているアフガニスタンの日本語教室の方々の参加もあり賑やかなものとなった。保育者養成校としての本学らしい学園祭となった。

このような状況の中で、退学者は、1学年は5名、2学年以上は3名と若干ではあるが、昨年度より減少した。

就職に関しては依然好調であり、就職決定率は100パーセントであった。公務員（公立保育所）試験については、受験者9名、合格者6名となり、合格者は昨年度よりも増加した。昨年度よりも学生数が30名程度減少している中で、公務員合格者の割合は大きく向上しており、これも一つの学修成果と考えられる。

2024年度については、次年度に留年する学生、科目等履修生として学ぶ学生も前年度より減少し、2年間で免許、資格を取得し、それを活かして就業していく者が多かった。

2024年度は、科目等履修生が多かったが、多くは自身の課題と向き合い、必要な単位を修得し、保育業界へ就業していった。

（2）学生募集

2020年度から募集定員を120名に変更したが、それ以降、3年連続で定員の確保ができた。しかし、2024年度の募集に関しては、前年までと同様の募集を展開してきたが、定員を大幅に割り込み入学者84名となった。

単に本学の募集の問題だけではなく、保育職希望者を増やすためにも、「保育」という仕事の魅力を発信していくことが求められる。

2024年度は、2025年度募集へ向けて、教職員一体となり新たな取り組みを行ったが、即効薬となるようなものではなく、成果が出るには多少の時間が必要である。

(3) 卒業生支援、その他の活動

2024年度も、こども臨床研究所を中心に、さまざまな活動に取り組んだ。

卒業生支援として、引き続き卒業生に対して、不安を解消するために学校へ集まる機会を設けた。当初こそ、参加する学生がいたが、後期に向かって参加者は減少していった。同期の仲間や教員と話をしたい学生は一定数おり、特に4～5月の時期に関しては、相変わらず意味がある。

卒業生を中心とした研修会「保育実践研修会」も3ヶ月に1回のペースで開催することができたが、参加者が少なく、開催の仕方の工夫が求められる。

「あそぼうかー」については、月1回程度で附属幼稚園、明德やちまたこども園での活動が中心となった。

「公開講座 めいトーク」は7月に、『見直そう！保育現場の「なぞルール」「あたりまえ」』と題し、元本学教員の石井章仁氏を招いて実施した。参加者は48名であった。

子育て支援事業である「たいむ」については、週2回ではあるが、参加者数を限定することなく、通年で実施することができた。

ちば産学官連携プラットフォーム事業の「子ども子育て支援連携ワーキンググループ」の活動も継続して行った。

また、千葉市と千葉市内の三短大（千葉経済大学短期大学部、植草学園短期大学、本学）で運営しているNPO法人「千葉市保育者研修センターMANABI」の事業に講師を派遣し、以下の研修を行った。

①「千葉市子育て支援員研修」の「基礎研修」と「現任研修」

②「キャリアアップ研修」

高校との連携については、家庭科、保育等の授業を教員が担当する機会が増えた。土気高校とは高大連携の協定を締結した。

(4) 短期大学認証評価を受けての改善

2023年度に第三者評価を受けたが、そこでの指摘事項から、シラバスの記述内容の統一、ディプロマポリシーの点検・カリキュラムマップの見直しを行うことができた。引き続き課題として残る事項もあり、継続して改善を図っていきたい。

教員の研究活動については、科研費の申請を行う者が増加したが、採択には至らなかった。また、本学紀要への論文・教育実践報告等の投稿が増加した。附属幼稚園の教員と協働しての研究も見られ、「総合保育創造組織」としての成果となった。

(5) 教職員の資質向上に関して

本学ではFD委員会が設置され、毎月の教授会後に委員会を開催している。さらに年4回、半日ないしは1日かけての研修を行っている。また、年2回FD・SDを合同で実施し、学内の課題について教職員全員で共有、検討する機会を設けている。今年度はディプロマポリシー・カリキュラムツリーの見直しを中心に行った。

毎年、授業アンケートを行い、学生からの声を活かして授業改善に繋げるように努めている。授業評価は概ね高評価である。アンケートの回収率が低い傾向があり、改善が必要である。

教員の研修については、保育士養成協議会の研修会等に参加する機会を設けている。保育士養成協議会主催の保育実習指導員の講習を多くの教員が受けており、今年度も新たに2名の教員が受講し、「認定実習指導者」となった。

研究活動、社会的活動を行うことも教員としての力量を育てることになる。本学での実践について、学会での発表、紀要の執筆等が活発に行われた。保育現場での研修講師となる教員も多かった。これらの活動が、授業実践に反映されることが期待される。

非常勤講師については、コロナ禍以降、懇談会を持つことができていなかったが、2024年度については開催することができた。本学が大切にしていること、「体験から学ぶ」という学習方法を改めて伝え、共有し、授業実践上の課題について話し合うことができた。

(6) 教育環境の整備

従来のPCルームを学修室として教室化する整備を行った。また、プロジェクターの更新を行った。予算の関係から、限られた整備となり、次年度以降に検討事項として残った事業もあった。

まとめ

教育活動自体は、コロナ以前と変わらない状況になった。「体験から学ぶ」・「学び合う」という本学の特色を十分発揮することができた。一人ひとりに合わせた丁寧な支援も変わらず行っている。

これらの結果として、就職希望者が100%就業するという結果につながった。公務員試験の合格者が増えたことも学修成果の表れといえる。

一方で、学生は様々な学びが可能になってきているにも関わらず、コロナ禍の状況にあった高校時代の影響もあり、さまざまなことに興味関心を向ける姿勢は消極的なところも見受けられた。引き続き、学生のモチベーション向上を図っていくこ

とが課題となる。

2024年度 卒業生就職状況（2025年3月31日現在）

卒業者数	88人
就職希望者数	84人
就職決定者数	84人
就職決定率	100%
進学者数	0人

（就職先内訳）

就職先種別	人数	割合
幼稚園	4人	4.8%
認定こども園	14人	16.7%
保育所	37人	44.0%
福祉施設（保育所を除く）	17人	20.2%
認可外保育施設・学童保育	3人	3.6%
公務員	6人	7.1%
一般企業等	3人	3.6%

*付記

今年度に関しては、保育園、施設への就職者の割合が微増した。幼稚園、こども園への就職の割合は微減した。

公務員への合格者は増加した。学生数からみた割合は大きく向上した。

今年度の傾向として、1つの園に受験者が集中する傾向が見られた。

4. 千葉明德高等学校

2024年度は、新入生290名（10クラス）を迎え入れ、2年生が385名（12クラス）、3年生が367名（11クラス）、合計1,042名のスタートとなった。2024年度入試では、これまで2年連続で募集人員より超過気味であったため、併願推薦のポイントを2ポイント引き上げた入試を行い、その結果として、入学生数がかなり絞り込まれる結果となった。

そのため、入学生の学力レベルは大きく上昇し、そのことは模試成績などで顕著に見られる。3年間でどう育てていくかが大事なテーマであり、そのため、2024年度は学力上昇が見られた分、教科指導や進学指導もより高い目標を設定し指導にあたってきた。

た。前年度の大学入試で飛躍的な合格実績を出したことを踏まえて、進学指導面でも高3生の指導を充実させた。結果として、2025年度の大学合格実績では、国公立の合格数では前年度ほどは伸びなかったものの、九州大や北海道大の旧帝大をはじめ、6名が合格を果たした。また、早慶6名（実人数）をはじめ、GMARCHレベルでは70名を超える合格数にまで達する結果となった。

（１）教育活動の成果について

2024年度の教育方針としては、本校がこれまでに目指してきた「新しい進学校」化を推進し、「『思考する学び』を進化・深化させる」という目標を定め、これまで掲げてきた「思考する学び」をさらに発展・充実させてきた。そのことを踏まえて、学力向上のための3つのステップとして、

- i 基礎学力の充実
- ii 探究活動の充実
- iii 自律した学習者の育成

に則り、段階的に学習を進める体制づくりを行い、大学進学実績や募集状況の向上を目指してきた。

① 自学自習の確立

自学自習の時間の確保のため、学年ごとに学習計画や振り返りをホームルームで徹底して実施し、授業や朝学習、セミナーにむけて、生徒のやる気を促してきた。進路実現に向けては、3年間の高校生活が充実したものになるために入学してから早い段階での動機づけが必要であり、その時期の計画的な取り組みについてさらに検討を要する。

② 教科・総合の指導体制の強化

これまでの教科指導のあり方を踏まえながらも、より一層の内容の充実を促してきた。具体的には教員の授業研究や、進路を見据えたトータルな指導計画の策定を行った。教科指導にあたっては授業にとどまらず、課題や小テストの設定、長期休業中の学習の進め方、他教科とのバランス等、総合的な観点での学習指導の検討を実施した。

③ 総合探究

総合探究では、高入生については2022年度の新カリキュラム導入後、一貫してキャリア教育を行っている。1年生には「複業先生」を中心に、大学や学部のご案内や、外部からゲストスピーカーを招いて（あるいはオンラインで）講演を実施し、進路に眼を向けるための授業を実施した。また2年生は「キャリア甲子園」に参加し、企業からのミッションに取り組み、最終的にプレゼンテーションに仕上げた。その後の2年生の後半では、志望理由書の作成に取り組み、具体的な進路意識の喚起を行った。

※主な大学合格実績（２０２５年度入試）

北海道大１名、九州大１名、筑波大１名、茨城大１名、長岡技術科学大１名、
千葉県立保健医療大１名、早稲田大４名、慶應義塾大２名、上智大４名、
東京理科大１１名、国際基督教大１名、明治大１１名、青山学院大２名、
立教大１８名、中央大５名、法政大２９名、学習院大７名、
成成明学独國武４２名、日東駒専１００名、その他私大３７８名

（２）生徒募集の取り組みについて

２０２５年度入試は基本的に、推薦基準を前年度から据え置きで臨んだ。これは、２０２４年度入試で大幅にポイントを引き上げ（併願推薦で２ポイントの引き上げ）、学力層を引き上げたが、入学者数も大幅に絞り込むに至ったためである。ただし、英検取得者についてはより積極的に評価するようにし、専願・併願ともに、その他（出席状況、部活動、漢検・数検）の優遇措置から独立して、英検３級で１ポイント加算するように設定した。このことが結果として功を奏し、成績基準では下位層であっても、英語を含めて総合的な学力が高い生徒を確保することができた。また、特待生規則の変更を行い、特待生枠を大幅に絞り込んだ。結果、高校入試において特待生制度はほとんど影響しないことが明らかになった。裏を返せば、金銭的な優遇措置よりも教育のレベルや中身で本校を選ぶ受験生が増えたといえる。

体験入学会や学校説明会はほぼ例年通りで実施したが、どの回も定員オーバーとなった。このことから２０２６年度入試に向けては、回数を増やして実施することが望まれる。

２０２５年度入試では、結果として３８９名（１１クラス）の入学者を獲得し、上々の成果を修めることができた。また２０２４年度大学合格実績に基づいて、受験者層が全体的にレベルアップし、各コースの合格点を高めに設定することができた。また、合格者の歩留まりも高く、学力面で期待ができそうである。

（３）新たな取り組みとその成果について

２０２４年度、特に意識して取り組んだことは、以下の点が挙げられる。

①新大学入試（２０２５年度入試）への対応

２０２４年度の３年生は、新カリキュラム最初の学年で、共通テストでは、「情報」の新設や各教科での「探究」の導入など内容が大幅に変更となり、その対策として情報収集や指導内容の変更等が必要であった。本校にとってはかねてより目指してきたＩＣＴ教育や「思考する学び」の延長線上にあるものであったため、該当学年の生徒や教員も十分に対応することができたといえる。

2025年度大学入試を踏まえて、今後、選択科目の一部改定等を実施し、大学受験指導の充実に取り組んでいきたい。

②面談の充実

面談については、生徒個々人のレベルで学習の方法や進度を絶えず改善するために必須である。学校の年間行事において、個人面談及び二者面談を数回設定した他に、必要に応じて随時実施した。特に3年生、一貫コース、特進コースはかなりの回数行い、進路目標を明確にして、そのための方策を具体化するべく、担任のみでなく進路・学習指導、教科担当との面談も行っている。今後は、1・2年生についても面談を通じて早い段階からの意識づけと進路目標の明確化を促していく必要がある。

③明德館（図書館）・コンピュータ室のリニューアル

「思考する学び」の実現に向けて、施設設備面では、コンピュータ室と図書館のリニューアルがなされ、ICTを駆使した最先端の学習環境が整いつつある。特に図書館については、ラーニング・コモンズならびに自習スペースとして新たに生まれ変わり、「明德館」として運営を始めた。自学自習のスペースとしては、すでに生徒が使用しはじめているが、2025年度以降は、総合学習や総合探究での探究活動で積極的に活用していきたい。

（４）教職員の資質向上について

教職員の資質向上にむけた研修等で主なものは以下の通りである。

①授業研究

例年通り、新任教員は年2回春秋に授業公開を行い、教科や教務の教員が参観して教科会内で授業内容を討議している。また各教科では、一部ベテラン教員が、テーマを設定して教科内で授業公開を行っている。

②大学入試問題の分析

各教科では、共通テスト含めて変わりゆく大学入試対策について、教科内で分析してそれらを職員会議で報告してもらっている。学年や担任レベルでは、他教科についても全教員が傾向などを把握して対策を検討している。

③予備校が主催する教科研修への参加

駿台や河合塾の主催する教員向け研修には、毎年、各教科から積極的な参加が見られる。近年、これらの研修費はかなり高額となっているため、研修費の3分の2を補助している。

④各種団体が主催する教員向け研修

ベネッセや東進等では、受験や教育情勢等に関する教員向け研修を、来場型またオンライン形式で随時実施しているが、それらへの積極的な参加を促している。また各団体主催による教員向け ICT 研修や探究学習の研修についても

同様である。

⑤語学研修への参加

英語科教員は特にスキルアップのため、セブ語学研修の生徒引率を兼ねて、現地のプログラムに参加するように促している。

⑥私学協会主催の研修への参加

私学協会主催の研修は、教科別研修会を含めて積極的に参加するように促している。

(5) その他

①総括・方針のあり方の変更

従来の業務の流れでは、その年度の総括と翌年度の方針を同時に進めることになり、総括と方針の接続がうまくいかなかった。そこで今年度は、10月に行われる中間総括に重点を置いて、年度内で問題点を明らかにした上で、翌年度の方針づくりに取りかかるようにした。これにより、新年度の方針づくりにスムーズに取りかかることができるようになった。

②語学研修・国際交流の充実

本校において、語学研修や国際交流はますますそのニーズが高まり、円安や物価高にもかかわらず、海外に出たいという生徒がますます増加傾向にある。今年度は、セブの語学学校を開拓し、またニュージーランドの新たなプログラムに着手するなど、海外語学研修の枠を開拓する試みを行った。2025年度からは、セブ、オーストラリア、ニュージーランドで長期にわたるターム留学を導入するなど、従来以上に選択肢を広げた企画を用意し、生徒たちの参加を積極的に促していきたい。

③心のケア

ここ数年の傾向として、さまざまな要因による心の問題が顕著に見られ、長期欠席や転退学も多く見られるようになった。こういった問題に対しては、生徒相談や学校カウンセリングの体制強化の必要が迫られている。

5. 千葉明德中学校

2024年度は、千葉明德中学校の開校から14年目の年で、これまでに引き続き進学校化に向けて「思考する学び」を中心に学校づくりを推進してきた。

開校以来、着実に大学合格実績も伸ばしてきた中で、本校ならびに中高一貫コースに対する評価も定着しつつあり、入学志願者数・入学者数も順調に伸ばしてきた。2024年度は入学者数がやや減って77名（3クラス）となり、これに加えて2年生83名（3クラス）、3年生81名（3クラス）、合計241名（9クラス）

でスタートし、開校以来はじめて各学年3クラス体制が整った。

また、大学合格実績についても、昨年度に続き顕著な実績を築くことができた。2024年度の中高一貫コース卒業生は61名で、国公立や早慶、GMARCHと難関大学に数多く合格した。特に目立った点は、総合型選抜で九州大学、北海道大学、立教大学と難関大学に合格者を出すことができたことである。これは、総合学習・総合探究の「土と生命の学習」、「課題研究論文」、「探究活動」という本校のカリキュラムの柱の部分で、その教育の成果が発揮されたものである。次年度以降もカリキュラムをより精選して本校らしい教育を行っていきたい。

(1) 教育目標の成果について

これまで中高一貫コースは、建学の精神に基づき、生徒一人ひとりの豊かな成長を目指し、教育目標である「行動する哲人」を具現化するために、「思考する学び」の推進に取り組んできた。本校では設立以来、大学入試改革や学習指導要領の改定といった文科省レベルの教育改革に先立って、探究活動やICT教育、グローバル教育等において、独自の先進的な取り組みを進めてきた。具体的には、生徒一人ひとりが自らのiPadを活用することで、主体的・対話的な学びを推し進め、その成果をプレゼンテーションや課題研究論文を通じて発信する取り組みを行っている。こうした実践においては、教職員も絶えず移り変わる新しい情勢を踏まえながら指導内容を改善している。そうした試みの中で、中1・2の「土と生命の学習」と中3の「課題研究論文」は、その内容をより進化させ、充実したものとなった。「土と生命の学習」は、本校の探究活動の導入として定着し、ここでの学びを通して、問いの設定や課題への取り組みについて基本的なことを学び、その延長線上に「課題研究論文」が位置付けられている。「課題研究論文」は、年々、レベルが高くなっている。それに続く高校1・2年次の探究活動も定着し、ポスターセッションでの発表内容についてもより豊かなものになっている。千葉大をはじめ、各大学や学会等の高校生向けプログラムに参加する生徒も年々増加し、本格的に研究に取り組む生徒も見られるようになった。こうした取り組みは、生徒の進路選択にも繋がり、総合型選抜での上位難関大学への合格を果たすケースが多々見受けられるようになった。高校3年次は、それまでに培ってきた学習成果や研究に対してのモチベーションによって、進路実現に邁進する段階と位置付けて、進学指導・学習指導に取り組んできた。

※主な大学合格実績（中高一貫コース61名）

北海道大1名、九州大1名、長岡技術科学大1名、早稲田大3名、慶應義塾大1名、上智大3名、東京理科大3名、国際基督教大1名、明治大7名、青山学院大1名、立教大8名、中央大3名、法政大16名、学習院大3名、成成学

独國武14名、日東駒専24名、歯・看・薬11名、その他私大85名

(2) 生徒募集の取り組みについて

2025年度入試においても、中高一貫コースの大学合格実績等の成果を踏まえて、受験者数は上昇傾向にあり、12月入試や一般入試についても受験者が増加した。2025年度入試は、特待生制度の変更に伴って特待生の人数枠を大幅に絞らしたことで歩留まりが心配されたが、74名の新入生を獲得した。前年度よりはやや減少したものの、本校の人気や評価は着実に高まっているものと自負している。学校説明会等では、本校の教育の特長をアピールするために、生徒のプレゼンテーションやインタビュー等、生徒のリアルな活動の様子を積極的にアピールしてきた。特にiPad等のICT機器を活用した発表や英語によるスピーチ等を全面に打ち出し、生徒の学習の様子を直に見ていただくことで、本校の魅力を伝えることに成功した。

入試については、適性検査型入試において東京から多くの志願者が受験し、市川会場の受験者数は過去最高となった。本校の適性検査型入試問題は、公立中入試に完全準拠し、都内の有名塾からも高い評価を受けている。また、本校の「思考する学び」に沿った問題を毎年出題しており、本校のカリキュラムを体現したものとなっている。一方で、一般入試における志願者数の増加が今後の課題である。本校を志望する受験生が一般入試に臨み、入学するという流れを着実に築いていきたい。また、次年度に向けては、入試の段階で「選抜クラス」合格枠を設定して、本校の偏差値を上げ、学力上位層の確保をしていきたい。

(3) 新たな取り組みとその成果について

①総合学習・総合探究の充実

総合学習・総合探究は、さらに内容を深めたものにした。具体的に述べるとデータ分析・活用や思考の深化などである。データ分析・活用という観点では、本校の教育目標に掲げている学力として数理実証力があるが、総合学習・総合探究では、実験や観察のデータ化、またオープンデータの活用が進んでいる。また、統計学の知識を活用した分析も多々見られるようになった。思考の深化という観点では、さまざまな先行研究を参照にしながら、自分なりの論理を展開する者が増え、生徒の思考に厚みが出てきたといえる。

②教科指導の充実

教科指導においては、上位層へのモチベーション喚起と下位層へのフォローをより充実させた。朝学習は、レベルを定めて各種検定試験に見合う内容のものとし、目標を明確に設定した。また下位層も学習へのモチベーションを高め

るために、補習や面談等のフォローを強化し、学習課題を明確にして取り組ませるようにした。

③卒業生とのつながりの構築

本校の一貫コースならではのつながりを築く取り組みを推進している。一貫コースの卒業生を招いて、毎年、ホームカミングデーを実施しているが、開校から14年が経過して卒業生も各方面で活躍しており、その内容も充実したものとなっている。在校生にとって卒業生との交流は、進路意識を高めるための貴重な機会となっている。

(4) 教職員の資質向上について

高等学校と同様。

(5) その他

高等学校と同様。

6. 認定こども園千葉明德短期大学附属幼稚園

(1) 運営方針、教育・保育の重点施策に対する成果について

本年度も豊かな自然環境を最大限に活かした保育実践を継続し、子どもたちの主体的な学びと育ちを支える環境づくりに努めた。「園庭推進」「芸術推進」

「ICT化推進」の三本柱を軸に、遊びや生活を通して資質・能力の育成に取り組み、子どもたちの探究心、表現力などの向上が随所に見られた。特に園庭推進においては、新たな遊具導入や園庭空間の見直しを行い、子どもたちが自由に自然と関わる場の創出に注力した。新しい年少用のすべり台は年中長用の遊具への緩やかな移行に繋がる、スクランブルネットやクライミングウォールを上るタイプとなっており、身体能力の発達に寄与するものとなっている。加えて、園児達が園舎裏手の松の森で遊ぶ頻度を高め、自然の中での体験を通じて、季節や命の変化に気づく感性が育まれた。芸術推進の取り組みとしては、年長児が千葉明德学園100周年記念事業講演会において手話合唱の発表に取り組み、多くの学園関係者や保護者の前で歌を披露した。ICT化推進においては、正規職員用PCを拡充し、ICTを導入する業務内容の検討、精査を進めた。同時に情報漏洩等の防止のために利用規定を作成し職員間で共有した。また、教職員の資質向上にも取り組み、短期大学教員との連携による研修や日々の保育の振り返りを通じて理論と実践の往還が図られた。これらの積み重ねにより、園全体の保育の質は着実に向上している。

（２）募集活動に対する成果について

２０２４年度に行った募集活動については、ひよこ組の保育内容の充実と園見学会の開催により、地域における園の認知度と信頼感の向上を図った。園見学会では、職員が教育・保育方針を丁寧に説明し、参加された家庭が安心感を得られるよう努めた。また、「園庭開放」「園JOY」など、保護者参加型のイベントでは、園と家庭が一体となって子どもを育てる意識の醸成を図った。参加者からは「園の雰囲気がよく分かった」「安心して預けられる」との声が寄せられ、入園に向けた前向きな動きが見られた。３歳児１号認定園児数は千葉市中央区における最多の５７名となり、定員には満たないものの前年を上回った。総園児数は、卒園する年長児が多かったため減少傾向にある。地域における児童数が減少する中で、相対的には本園の募集状況は不調ではない。募集活動で得た、子どもが増えている地域情報等に重点を置き、次年度募集への対応策、具体的には子どもの増加地域へのバスコース新設、パンフレット配布等を検討し、更に、新入園児募集に特化した分掌業務を新設し、募集体制の強化に繋げた。

（３）新たに行った取り組みとその成果について

前述の、１００周年記念事業講演会における園児の手話合唱や、短大における音楽イベント「明德はうたう」への園児・保護者の出演等、短大・中高との連携強化に努めた。また、短大教員との連携をさらに強化し、継続的に行われている「あそぼうか〜プロジェクト」の他、非常勤講師による製作分野の保育実践、園内研修等での専門的視点によるアドバイスや実践的な支援が効果を発揮した。

（４）研修等による教職員の資質向上の成果について

本園では定期的に園内研修を実施しており、日々の保育実践や園運営に直接的、もしくは間接的に役立つ様々なテーマ設定により職員の資質向上を図っている。２０２４年度に実施した研修の中で特筆すべきものとしては、本園を中央区の会場とした千葉市幼稚園教育研究会が挙げられ、来園された他園保育者の方々から本園の保育や環境について様々なご意見、ご感想をいただき、本園の保育を客観的な視座で見直す貴重な機会となった。更に、短大の教員による音楽に関する研修を、職員からの要望により設定した。子どもたちに多様な音楽経験を提供するための具体的な方策を学んだことで、保育者自身の音楽観が広がり、非常に即効性のある研修となった。また、明德系列園の園長会において、「子どもの権利条約」について短大教員を講師として学びの場を設定し、昨今の保育現場における倫理観も含めて、保育者に求められる意識の醸成を図るべく、園内で資料の共有を行った。その他、幼稚園協会による研修等への参加による成果、多様化する保育への対応を園全体として取り組むための体制作りが今後の課題である。

(5) 園児数の動向等について

少子化の影響を受けつつも、園の環境と保育の質が評価され、前年度を上回る（3歳児1号認定）募集結果となった。特に園庭開放や園見学会など、園を実際に体感してもらう機会が入園動機につながっていることが窺える。今後も出生数の減少傾向が続くことを見据え、保育の魅力や園の特色を多角的に発信し、SNSや地域との連携による広報活動を強化していく必要がある。学園組織の一体性を活かし、系列園や短大との連携を軸に、多様な保育ニーズへの柔軟な対応を推進していく。

【月別在籍数】

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
在籍数	279	280	280	280	279	280	279	279	279	278	279	278

【年齢別在籍数/3月】

年齢	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
在籍数	15	15	69	83	96

【職員構成/3月】

職種	園長	副園長	主幹	保育 教諭	保育教諭 (パート)	栄養士	調理員 (パート)	看護師 (パート)	職員 (パート)	事務
人数	1	1	2	18	11	1	3	1	3	1

(6) 苦情（解決）について

2024年度は、職員の不適切な言葉遣いや、多くの業務を抱えている中で、個々の子どもへのより細やかな対応を要望する苦情が2件あった。学校評価アンケートの結果報告として上記の苦情への回答をした上で、園内研修、千葉県幼稚園協会研修、学園系列園研修を通し、保育者としての望ましい姿勢を明確にすることを話し合い、改善に努めた。

その他、天候不順による行事の延期に対する要望等についても、影響を最小限に抑えられるよう改善策を講じた。

7. 明德本八幡駅保育園

(1) 保育目標等に対する成果について

保育理念 「自分らしく生きる」～子どもにかかわるすべての人たちが～

保育目標 きらきら輝く子ども

- ・健康な子どもに
- ・感性豊かな子どもに
- ・友達と関わって遊ぶ子どもに

子ども一人ひとりが“主体”となって過ごせるよう、職員が子どもたちの成

長過程を把握し、それを全職員が情報を共有し、園全体でその都度どのようにしていったらいいかを話し合い、検討改善を重ねていった。

また、保護者の育児や子育てに対する悩みや不安に対して、担当職員だけでなく様々な職員と一緒に考えながら家庭支援を行い、相談や不安を伝えてくれる家庭が増加した。家庭に寄り添った対応ができているのではないかと感じる。

また、2024年度は、「幼児保育の充実」「感染症の予防対策を踏まえた保育」「保育士が進んで学べる」「ICTへの移行」の4つに重点を置き保育を行っていった。

①幼児保育の充実

2024年度は3歳、4歳クラスが混合クラスとなり、正規保育士2名で対応した。2023年度は、戸外遊び不足、シフト上で正規職員が不在の時間がある等の課題があり、体制、環境を整え、その課題を解決した。

また、公共交通機関等を利用し、園から少し離れた公園等へも活動場所を広げ、遊びの充実を図ることができた。

②感染症の感染予防対策を踏まえた保育

今年度は看護師不在であったが、職員一人ひとりが子どもたちの様子を細かく見て、情報共有や保護者への情報提供を行っていったことで、季節的な感染症は多少見られたものの、園内で流行することなく1年を終えることができた。

③ICTへの移行

登降園システムの導入し、出席簿、延長保育園児数、職員の勤怠管理を自動化することができ、これまで費やしていた時間を保育や別の作業に割くことができた。

(2) 募集活動等に対する成果について

4月は定員を割ってのスタートとなったが、6月の時点で定員を超えることができた。また、2025年度より60名定員となるため、4月入園に向けて9月以降の見学日数、見学枠を増加し、また開始時間も午前・午後に分けて参加しやすいようにした。すぐに予約枠が埋まる月もあり、園の状況に合わせて追加で見学対応も行った。

(3) 新たに行った取り組み等とその成果について

4歳児を中心に、公共交通機関を利用し園から少し離れた公園へ戸外活動を行った。また、保護者の同意を得てお弁当を持つのプチ遠足も行い、保護者からは好評であった。

毎年8月に実施している、卒園児が参加する「めいとくのつどい」を、2024年度より在園児も参加できる行事へと改め、中身の充実を図った。時間帯を分

けて行い、より多くの参加者が集まり、卒園児・在園児ともに楽しむことが出来た。

(4) 研修等による教職員の資質向上の成果について

保育園の保育理念や、保育目標に対し内部研修を重ねた。若手職員も自らの意見が出しやすいように、ポストイットやエマージェント方式を取り入れて行ったことで、全ての職員が自らの意見や聞きたいことなどを表現することができた。

また、外部研修についてオンラインも利用しながら、時間を上手く使って参加し、全体、個別で受講して各職員学びを深めることができた。次年度も継続して実施していきたい。

(5) 苦情（解決）について

特になし

8. 明德浜野駅保育園

(1) 保育園運営に対する成果について

園児数については42名でスタートし、(6)園児数の動向等に示すように年間を通して定員を充足している。浜野地域では、0歳児・1歳児の待機児童が多く、小規模園からの転園先となる3歳児の受け入れ先が不足している状況である。特に本園は入園希望が多く、千葉市子ども家庭課と連絡を取り合いながら、可能な範囲で受け入れている。

(2) 保育目標と成果について

昨年度より、年間行事を少しずつコロナ禍以前と同様に戻し、今年度は概ね通常の園行事を行うことができた。それにより保護者との情報交換や保育園理解が更に深まっている。園行事への参加も多く、アンケートによると満足度も高い。また、卒退園児を対象とした「めいとくのつどい」には、子どもと保護者、退職した職員など合わせて100名を超える参加があり、ゲームや制作などを通して更に本園での思い出を作れるようにしていった。ゲームの景品として「保育体験チケット」や「給食試食チケット」を配布したところ、春休みを利用して園生活を楽しむ小学生の姿も見られた。その際の嬉しそうな様子からも、本園の目指す「大きな実家」の役割が果たせていると考える。

(3) 募集活動と成果について

今年度も、できるだけ土曜日の見学を推奨し、ゆっくり園内を案内したり、説

明や質問を受けたりできるようにしていった。その際に本園の保育理念や決まりごとなどを、丁寧に伝えることを心掛けてきたこともあり、次年度も4月より定員は充足されている。

(4) 新たに行った取り組み等とその成果について

公共交通機関を使った卒園遠足を再開した。コロナ禍で実施できなかった電車やモノレールを利用した遠足を6年振りに再開した。行き先は、年長児のリクエストである千葉市動物公園で、初めてのモノレールに緊張する園児もいたが楽しい経験となった。

(5) 研修等による教職員の資質向上の成果について

園内研修の充実

より実践的な研修をしたいという職員の意見を取り入れ、年間を通して「エピソード研修」を実施し、クラスごとに事例をあげて、自分たちの保育について職員間で積極的に意見交換するとともに、お互いのクラスを理解し合う時間を作っていた。更には、不適切保育や事故防止についても、研修報告を兼ねながら職員への周知に努めた。

また、看護師による「手洗い」についての実践的な研修を、園児と一緒に行ったことにより、手洗いへの関心が高まり、日々の保育に活かすことができ感染症の防止にもつながっている。

(6) 園児数の動向等

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	42	42	41	42	42	42	42	42	42	42	42	43

【年齢別在籍数/3月】

年 齢	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
在 席 数	7	8	7	9	6	6

【職員構成/3月】

職種	園長	主任	副主任	保育士	栄養士	看護師	調理員	保育補助
人数	1	1	1	10	1	1	2	1

(7) 苦情（解決）について

特になし

(8) その他

千葉市による指導監査が行われたが、指摘事項はなく良好な運営がされているとの評価を受けた。幼保運営課指導係による巡回指導でも、同様の評価を受けている。

9. 明德やちまたこども園

(1) 運営方針、教育目標等に対する成果について

学園内での異動や新規採用による職員の入れ替わりがあったため、改めて本学園の掲げる建学の精神や本園の教育・保育目標を周知しながら新体制づくりをしていった。このことから、前年度同様、職員一人ひとりが丁寧に子どもとかかわり、その子がその子らしく、その年齢らしく成長するための支えは出来ていたのではないかと思う。また、発達の特性や連続性を考えたかかわりや環境構成、玩具等の提供、園庭だけでなく、園外への散歩等も取り入れるねらいや根拠をしっかりとつことで、教育・保育目標を踏まえた実践が進んでいると考える。

本園の特色でもある食育は、近隣やお付き合いのある農家の方のご厚意で、5歳児中心に田植え体験や芋ほり体験などを行い、子どもたちが調理をして食べるという経験もできた。また、栄養士が積極的に保育の中に入り調理活動を行うことが、食への更なる関心へとつながっていた。

安全教育に関しては、火災や地震だけでなく、Jアラートへの対応訓練を取り入れた。また、地震が来た時に子ども自身が自分の身を守るための行動や姿勢の見直しや職員の持ち出しの再考も行った。職員の救命救急訓練、蓄電池の購入など災害に対する対策も行うことで、災害に対する意識が高まっているように感じる。

(2) 募集活動に対する成果について

ホームページにおいて園日誌の発信を行うことはできなかったものの、子育て支援センターでの活動を通じ、実際に園に足を運んでもらう機会があり、園全体の雰囲気や考え方を知り、賛同することで入園につながったと思われる。

0歳児も10月までに定員6名となり、園全体としては定員をオーバーして84名の園児を受け入れた。途中入園の問い合わせも数件あった。

2025年度の3歳1号認定児は定員数のみの受け入れであったが、定員以上の申し込みがあり、全員を受け入れることができなかった。(2年連続定員120%超過での受け入れは減算となるため)入園枠が少ないことで「明德は人気があるから入園できない」という声が聞かれたり、1号認定より2号認定での入園希望児が増えたりしているため、今後対策を考えていきたい。

(3) 新たに行った取り組み等とその成果について

計画していたテラスの拡充、足洗い場の増設、花壇をはじめとした園庭全体の細かな場所の整備も行い、活動場所を広げることで、保育の充実を図ることができた。また、南西門の改修やターザンロープの強化等、安全対策を取ることで、園を利用する全ての人々が安心して過ごせる場所となるようにした。

年度末だけでなく、行事後に保護者へアンケートを取るようにして、子どもへの思いや園に対する期待や要望等の把握に努めた。本園の教育・保育方針に賛同いただけるありがたい声も多い。また、保護者のニーズもより詳細に把握でき、柔軟な対応につながっている。

(4) 研修等による教職員の資質向上の成果について

系列園の園長や栄養士を招いて園内研修を行い、保育者としての姿勢や衛生面の見直しなど、根拠を持った学びができた。これをきっかけに徐々に職員の意識が変化し、実践に結びついている。

明德系列園の階層研修やキャリアアップ研修に参加することで、知識を得たり、自園とは違った視点からの子どもの見方、接し方などを学んだり、実践に活かそうとする姿勢が見られている。

全体的な計画・教育課程・年間指導計画・月案・日誌等、指導計画の必要性について改めて学ぶ機会として園内研修を行った。更に、ケース会議・保育会議等を設け、実践に活かせるようにしてきた。徐々にではあるが、子ども一人ひとりの実態や家庭背景をより捉えようとしたり、発達の連続性を考えて保育にあたろうとしたりする姿勢が見られるようになってきた。

(5) 苦情（解決）について

保護者の方より、一部職員の送迎時や電話での対応について相談を受けた。職員全員に、対応の仕方について周知徹底するとともに、保護者の方へは謝罪し、今後の対策をお伝えした。

Ⅲ. 財務の概要

1. 事業活動収支の推移

(単位：千円)

教育活動収支	収事業の活動の支部動	科目/年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
		学生生徒等納付金	1,015,660	1,067,171	1,095,329	1,042,913
		手数料	29,703	32,714	33,666	38,455
		寄付金	12,997	14,168	14,807	23,013
		経常費等補助金	1,206,747	1,242,367	1,316,956	1,385,096
		付随事業収入	76,893	75,459	91,210	93,385
		雑収入	71,637	61,110	76,555	59,459
		教育活動収入計	2,413,636	2,492,989	2,628,525	2,642,323
	支事業の活動の支部動	人件費	1,649,141	1,697,259	1,784,048	1,783,746
		教育研究経費	444,604	570,863	573,263	584,750
管理経費		223,570	201,946	195,364	199,817	
徴収不能額等		39	0	0	0	
教育活動支出計		2,317,354	2,470,068	2,552,676	2,568,314	
教育活動収支差額			96,282	22,920	75,849	74,009
教育活動外収支	事業活動収入の部	受取利息配当金	509	385	1,617	1,372
		教育活動外収入計	509	385	1,617	1,372
	事業活動支出の部	借入金等利息	16,094	13,270	11,328	11,104
		教育活動外支出計	16,094	13,270	11,328	11,104
	教育活動外収支差額			△15,585	△12,885	△9,711
経常収支差額			110,393	10,035	66,138	64,276
特別収支	収入の事業活動の部	資産売却差額	0	0	0	34,978
		その他の特別収入	15,461	93,078	44,818	23,394
		特別収入計	15,461	93,078	44,818	58,373
	支出の事業活動の部	資産処分差額	5,539	16,409	19,134	384
		その他の特別支出	0	0	0	0
		特別支出計	5,539	16,409	19,134	384
	特別収支差額			9,922	76,669	25,683
〔予備費〕						
基本金組入前当年度収支差額			110,732	86,705	91,821	122,265
基本金組入額合計			△133,543	△310,423	△254,872	△338,488
当年度収支差額			△22,811	△223,718	△163,050	△216,223
前年度繰越収支差額			△4,049,003	△4,050,506	△4,274,224	△4,437,274
基本金取崩額			0	0	0	0
翌年度繰越収支差額			△4,071,814	△4,274,224	△4,437,274	△4,653,497
事業活動収入計			2,426,890	2,586,452	2,674,961	2,702,069
事業活動支出計			2,316,158	2,499,747	2,583,139	2,579,803

(注) 金額は、各項目において千円未満を四捨五入して記載しており、合計額が一致しない場合もある。

2024年度決算は、事業活動収入27億206万円に対し、事業活動支出は25億7980万円となり、基本金組入前当年度収支差額は、1億2,226万円の収入超過となった。（2012年度から13期連続での収入超過）また、当年度収支差額は2億1,622万円の支出超過となった。教育活動収支差額は7,400万円の収入超過で、前年比は184万円減少、経常収支差額は6,427万円の収入超過となり、前年比186万円の減少となった。

減少の主たる要因は、短期大学、高等学校における総生徒数の減による、学生生徒納付金収入の減少であり、対前年比5,241万円と大幅な収入減となった。近年、定員確保が難しい短期大学、中学校、附属幼稚園においては、募集活動に最大限注力する他、収支均衡が保てる内部体制の改革が求められる結果となった。

明德本八幡駅保育園、明德浜野駅保育園、明德やちまたこども園においては、定員を充足し順調に推移しており、次年度以降の運営方針が各園ともに明確に掲げられ、定員変更等戦略的な運営がなされている、また、それぞれの地域からの信頼は厚く今後も安定した運営が見込まれる。

2. 事業活動収支計算書における財務比率の推移

区分／年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
人件費比率 (人件費÷経常収入)	66.9%	67.6%	68.3%	68.1%	67.8%	67.4%
人件費依存率 (人件費÷学生生徒納付金)	164.1%	165.4%	162.4%	159.0%	162.8%	171.0%
学生生徒納付金比率 (学生生徒納付金÷経常収入)	40.8%	40.8%	42.1%	42.8%	41.6%	39.4%
教育研究経費比率 (教育研究経費÷経常収入)	19.4%	17.6%	18.4%	22.9%	21.7%	22.1%
管理経費比率 (管理経費÷経常収入)	10.6%	9.5%	9.3%	8.1%	7.4%	7.6%
基本金組入率 (基本金組入額÷事業活動収入)	1.9%	5.5%	2.8%	12.4%	9.5%	12.5%

人件費比率は、経常収入に対する人件費の割合を示す指標であり、給与水準だけでなく、適正な人員の観点、学生・生徒に対する教職員数も大きな要素となる。高等学校法人における同規模法人の平均人件費比率は、63.5%であるが、本学園の人件費比率は67.4%と、平均値を上回る比率となっている。

続いて、人件費依存率は、学生生徒納付金に占める人件費の割合であり、同規模法人の平均値は114%である中、本学園の人件費依存率は171.0%となった。学生生徒

納付金比率は、経常収入に占める学生生徒納付金の割合であり、学校法人の事業活動収入の中で最大の割合を占める。同規模法人の平均値は55.3%に対して、本学園は39.4%となっている。

教育研究経費比率、管理経費比率は、それぞれが経常収入に対する比率であり、教育研究経費比率は、比率が高いほど学生生徒への教育関係経費が多く確保されている指標となり、管理経費比率は、教育経費以外に使用される管理部門の経費等であり、比率が低い方が望ましいとされている。同規模法人の平均は、教育研究経費比率26.5%、管理経費比率6.3%に対して、本学園の平均値は、教育研究経費比率22.1%、管理経費比率は7.6%となっている。

基本金組入比率は、事業活動収入の総額から基本金への組入の状況を示す指標である。各年の比率が安定している場合は、2号基本金等への計画的な組入が行われている事を示す指標となる。同規模法人の平均は7.2%、本学園は12.5%となった。近年の設備投資に対する自己資金分（約2割）を単年度の組入額としているため、年度毎の施設計画により増減が見られる。

3. 施設・設備への投資額の推移

(単位：千円)

科目／年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
施設関係支出	135,826	380,298	164,485	318,508
設備関係支出	32,131	40,673	62,920	52,878
合計	167,957	420,971	227,405	371,386

2024年度施設関係支出の主なものは、第二グラウンド造成工事であり、全4期工事中の第1期工事として、北側県道からの侵入道路の整備工事が完了した。この工事が完了したことにより、北側県道から敷地内へのアクセスが容易となった。第二グラウンドの造成工事は2027年度まで計画的に行われる予定である。

建物支出は、短期大学における本館防火スクリーン設置工事、高等学校では、100周年記念事業として行った図書館の大規模改修（ラーニング・コモンズ化）が含まれており、体育館空調設備2期工事（柔・剣道場の空調設備）、合宿所リニューアル工事、学園本館の屋上防水工事、PC教室天井集音マイクの設置等の整備等も実施した。

構築物支出は、幼稚園での園庭遊具の更新工事、やちまたこども園では門扉改修を含む屋外環境の整備によるものである。

設備関係支出では、教育研究用機器備品として、短期大学では、別館講堂他2教室のプロジェクターの更新、中学校・高等学校において防犯カメラ20台を増設、校内アクセスポイント46か所のリプレイス、PC教室リモートカメラ、ミキサー、サーバーの設置等が特筆され、図書館リニューアルに伴う特注書架の設置、グループ学習を行う為の備品等も挙げられる。管理用備品では、明徳本八幡駅保育園において、冷凍庫、電気

消毒保管庫、殺菌庫等の厨房機器の更新を行った。

図書支出については、全部門合わせて1,320冊の購入し、学園全体の蔵書数は総計70,926冊となった。

4. 借入金推移

(単位：千円)

科目／年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
長期借入金	704,943	731,910	670,877	682,940
短期借入金	306,873	106,033	111,033	119,145
合 計	1,011,816	837,943	781,910	802,085

(注) 各年度とも3月31日現在の残高を記載している。

長期借入金は、前期末残高6億7,087万円に対し、図書館リニューアル工事に対する新規借入8,422万円、第2グラウンド造成工事に対する新規借入5,000万円、返済1億2,216万円を計上し、期末残高6億8,294万となり、前年比1,206万円の増加となった。

短期借入金は、運転資金借入1億5,000万円に対し、返済も同様に1億5,000万円とし、2023年度に引き続き、運転資金での短期借入金残高は0円を計上した。短期借入金は、毎年、期中の一時的な不足による資金調達を行うものだが、約定通りに年度末での返済を行うこととしている。今後、期中の調達を極力抑えることを目標とし、利払いを抑制しながら、安定した資金繰りに注力していきたい。このことから短期借入金残高は、返済期限が1年以内の長期借入金のための計上であり、長期及び短期借入金残高の合計は、前年から2,017万円増加し、8億208万円となった。

5. 貸借対照表の推移

(単位：千円)

科目／年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
資産の部				
固定資産	3,934,663	4,143,597	4,147,973	4,273,378
有形固定資産	3,794,635	3,988,728	3,986,572	4,120,118
特定資産	83,518	86,879	95,145	121,501
その他の固定資産	56,510	57,989	66,255	31,758
流動資産	1,096,710	689,825	634,558	659,930
資産の部合計	5,031,374	4,833,423	4,782,531	4,933,309
負債の部				
固定負債	863,898	888,747	819,747	825,393

流動負債	1, 104, 374	794, 870	721, 156	744, 023
負債の部合計	1, 968, 272	1, 683, 617	1, 540, 903	1, 569, 416
純資産の部				
基本金	7, 113, 607	7, 424, 030	7, 678, 902	8, 017, 391
繰越収支差額	△4, 050, 505	△4, 274, 224	△4, 437, 274	△4, 653, 498
純資産の部合計	3, 063, 101	3, 149, 806	3, 241, 628	3, 363, 892
負債及び純資産の部合計	5, 031, 374	4, 833, 423	4, 782, 531	4, 933, 309

《資産の部》

固定資産は4億2,337万円となり、前年度比1億2,540万円の増となった。有形固定資産は取得3億7,475万円、除却(資産の廃棄)は1,271万円、減価償却累計額を差し引いた有形固定資産は前年度比1億3,354万円増の4億2,011万円、特定資産は2,635万円増の1億2,150万円、その他の固定資産は、有価証券売却により、3,449万円減の3,175万円の残高となった。

特定資産での内訳は、中・高での100周年記念事業積立金、本八幡駅保育園、浜野駅保育園での施設・設備改修に対する積立金、やちまたこども園では園舎建替えに対する積立金を特定資産として計上している。その他固定資産の減少は、有価証券の減少で、千葉銀行株式40,800株の売却を行った。

流動資産は6億5,993万円となり、前年度比2,537万円の増加となった。流動資産の主な構成比率は、現金預金78.1%、未収入金20.9%、その他1%、未収入金は専任教職員の退職者数・授業料等の徴収状況・補助金の入金時期により大幅に増減する。2024年度の総資産額は、前年度比1億5,077万円増加の49億3,330万円となった。

《負債の部》

固定負債は8億2,539万円となり、前年度比564万円の増加となった。流動負債は7億4,402万円となり、前年度比2,286万円の増加となった。長期借入金は新たに1億3,422万円を借り入れ、長期の借入残高6億8,294万円となった。

返済期限1年未満の長期借入金1億1,103万円を返済し、長期借入金からの次年度返済予定の1億1,914万円の増加で1億1,914万円の残高となった。2024年度の負債の部合計は、前年比2,851万円減少の15億6,941万円となった。

6. 貸借対照表における財務比率の推移

区 分	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
総 負 債 比 率 (総負債÷総資産)	37.0%	39.3%	39.1%	34.8%	32.2%	31.8%
流 動 比 率 (流動資産÷流動負債)	73.2%	90.0%	99.3%	86.8%	87.9%	88.6%
基 本 金 比 率 (基本金÷基本金要組入額)	92.2%	90.0%	90.0%	90.1%	90.8%	91.0%
固 定 長 期 適 合 率 (固定資産÷(純資産+固定負債))	107.7%	102.7%	100.2%	102.6%	102.1%	102.0%

総負債比率は、総資産に対する負債総額の割合で、総資産に対する他人資金の比重を評価する重要な比率である。この比率は低いほど望ましく、50%を超過すると総負債が純資産を上回ることを示し、更に100%を超過すると総負債が総資産を上回る状態つまり債務超過の状態を意味する。同規模法人の平均総負債比率は13.3%、本学園は31.8%となった。

続いて、流動比率は、流動資産に対する流動負債の割合である。1年以内に支払わなければならない流動負債に対し、現預金または1年以内に現金化が可能な流動資産がどの程度留保されているかであり、学校法人の短期的な支払い能力を示す重要な指標となる。この比率が200%を超える場合、優良と判断される。逆に、100%を下回っている場合は、流動負債を固定資産に投下していることとなり、資金繰りに窮している判断となる。同規模法人の平均流動比率は342.7%であるが、本学園は88.6%となっている。しかし、本学園の場合は、近年、流動資産から有価証券若しくは特定資産（預金）へ資金の振替等を行っており、それらを含めれば流動比率は改善するものと思われる。

続いて、基本金比率は、基本金組入対象資産の要組入額に対する組入済み基本金の割合である。未組入額が多いということは、借入金や未払金で組入対象資産を取得していることを意味するため、100%に近い比率が望ましいとされている。同規模法人の平均比率は94.8%、本学園は91.0%となった。

固定長期適合率は、固定資産を取得する場合に自己資金の他に長期借入金で賄うべきであるという原則に対し、どの程度適合しているかを判断する指標である。同規模法人の平均比率は、87.0%、本学園は102.0%となった。100%より低いことが理想であるが、本学園の場合、流動比率と同様に施設設備引当特定資産として、固定資産の特定資産に短期的な資金の計上がされているためこの限りではないと考える。引き続き、財務内容及び財務比率の改善に向けて注力していく。

